

【幕末維新期の鹿島～明君直彬を支えた人々～ギャラリートーク】

地域を育てる

～中野万亀「夜学校」が遺したもの～

日時 平成30年5月20日

場所 エイブルホール

講師 福岡国際大学名誉教授

井上洋子さん



井上 洋子さん

はじめに「生きることは学ぶこと」

皆さん、こんにちは。本日はどうぞよろしくお願いいたします。私は大学で文学を担当しました後、福岡県人権啓発情報センターという所で仕事をしています。実は今年の人権テーマとして、夜間中学を取り上げているところですが、九州に公立の夜間中学は一校もなく、福岡県に三校の自主夜間中学が設けられています。様々な事情で教育が受けられなかった方、または卒業証書を授与されながら、実質的な学力がつかないまま卒業して、社会参加が困難になっている方など、たくさんの方が夜間中学で学んでいます。政府も教育保証の観点から公立

化を進めてはいますが、多くがボランティアで運営されているのが現状です。

先日も福岡の自主夜間中学の授業に参加してきたところです。皆さん明るくて、学ぶ喜びに溢れていましたが、教室の正面には「学ぶことは生きること」という標語が貼ってあり、これこそが生徒の皆さんの心意気そのものだと感じました。「生きること」に直結した「学び」一本当に、学ぶことの原点に触れた思いがいたしました。

本日は、中野万亀の「夜学校」についてお話しさせていただきますが、明治25年開校の「夜学校」と、現代の「夜間中学」とでは、勿論時代背景が全く違います。けれど、もっともっと勉強したいと思っている人々が、昼間は一所懸命に家の仕事や地域の仕事をして、その後、働く仲間と一緒に勉強するとき、どんなにワクワクしたことだろうと想像します。「学ぶことは生きること」という現代の夜間中学生と同じ喜び、そして私たちが殆ど体験できなくなっている「学ぶ喜び」が、きっとそこにはあっただろうと思われてなりません。

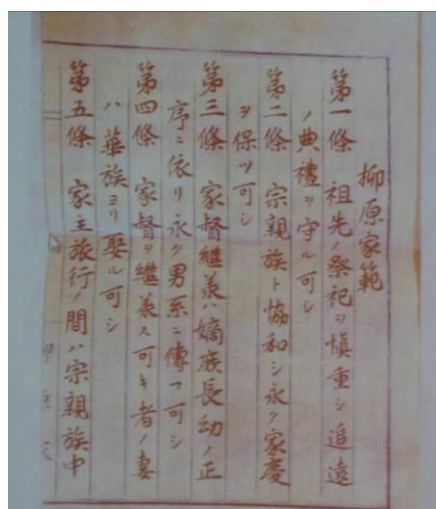
I 鹿島藩邸資料と「柳原白蓮」

少し話がそれますが、私が数年前に出した『柳原白蓮』（西日本新聞社）という本についてです。本の後にNHKの朝ドラ「花子とアン」が始まり、御存じのような白蓮ブームが起きて本当に驚きました。しかしそれはさて置きまして、私が本を書く時に心がけたのは、九州のことをできる限り書きたいということです。まず夫の伝右衛門ですが、ご存じのように、教育を受けたことがなく、字が一文字も読め

なかったということで、実に無様な形で喧伝されています。金に物を言わせて女性の足を引っ張り続けた悪いやつというのが、伝右衛門の評価でしょうか。けれど、そんな人が何故伯爵家の令嬢を娶ることが出来たのか、伝右衛門側からの視点を忘れずに書こうと思いました。それともう一点は、できるだけ九州の史料を使いたいということで、ここから鹿島と白蓮の接点が見えてきたのです。

福岡市博物館に「鹿島藩邸資料」があります。その中に、白蓮の父、柳原前光が、明治維新期の鍋島直彬に宛てた手紙が何通もあります。手紙からは、直彬と前光が実に親しい間柄だったことがよくわかります。そしてもう一つ有難かったのが、鹿島市民図書館が現在所有している「柳原家範」と呼ばれる文書でした。

柳原前光は京都の名門貴族ですが、大変優秀な人です。江戸城明け渡しの時、天皇の勅使として赴いたのが前光でした。維新後は若き外交通として中国、ロシア、ヨーロッパを回っています。あの鹿鳴館においても、佐賀本藩の鍋島公爵夫妻と並んで、前光夫妻もまた鹿鳴館の華とうたわれました。娘の「燐子」(後の白蓮)という名前も、鹿鳴館の輝く明りから命名したそうですが、この前光が直彬と非常に親しかったのです。



「柳原家範」

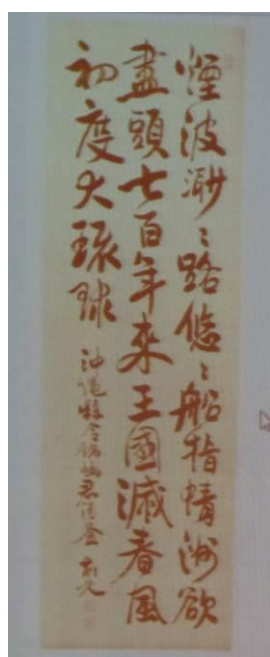
ここに現在市民図書館が所蔵している封書があります。「鍋島直彬殿 柳原義光」とありますから、前光が亡くなり、長男の義光(白蓮の兄)が出したもので、新しく決める「柳原家範」について相談した手紙です。これは父亡き後も、伯爵家として存続するために決めた規則集で、それを直彬公に相談しているのです。家督は必ず長男が継ぐべき、その妻は必ず華族から求めよとか、細々した規則が書かれています。白蓮の結婚もこの規則に縛られていくわけで、結婚の自由などもとよりありません。こうした資料を市民図書館のご厚意で、『柳原白蓮』に収めることができました。

それにしても、柳原当主と鹿島の殿様が何故こんなに親しいのでしょうか。直彬公は明治5年に、原忠順、牟田豊の二人を連れて、アメリカに行き、その翌年いち早く『米政撮要』を出版しています。こうした才能に注目したのが前光であり、直彬と親しい関係を結んだのです。

直彬を初代沖縄県令に推薦したのも前光で、前光からの祝いの漢詩も残っています。こういうものを相互に送り合うほど、二人は親密だったのです。歌人の白蓮がどんな文化環境で育ったのかは、とても重要ですが、傍証する史料がまさか鹿島にあるなんて、誰も想像していなかったと思います。

○鹿島に伝来する典籍の重要性について

東京に国文学研究資料館という、日本の古典籍を調査収集する機関があります。鹿島には江戸時代以来の典籍類がまとまった形で伝来しており、資料館の重点調査対象となっておりまして、全国的に広く知られているのです。私も20年以上にわたって資料館の委員として調査をさせていただき、そんな経緯から白蓮関連の資料にも目を通せた次第です。



柳原前光の漢詩

では何故、支藩に過ぎない鹿島に、優れた書物がたくさん伝来していたのかといえば、鹿島に優れた藩主が続いたこと、それがその理由になります。例えば、4代直條と孫の6代直郷は、『楓園家塵』などの随筆類を400冊以上残しています。これを読みますと、鹿島藩主が京都や江戸の一流の文化人たちと、どれほど盛んに文化交流していたか驚くほどです。それから、9代直彝の夫人・篤誠院も重要です。女性ながら様々な書物を集めています。さらに明君として名高い13代直彬が集めた書物が、鹿島には集積しているのです。鹿島は長崎に近いという地理的条件があり、中国文化や黄檗文化が他に先駆けるように伝えられ、文化的刺激に富んだ場所だったのです。しかし、忘れてならないのは、祐徳稲荷神社の「中川文庫」をはじめとする、集めた書籍を守ってきたという歴史の重みです。残念ながら鹿島鍋島本家の書籍は、危うく散逸しかけました。しかし、この時は、研究者が団結し、「関門海峡を渡すな」を合い言葉に、散逸を最小限に食い止めたのです。こうした働きかけに応じて、開館準備資金を潤沢に持っていた福岡市博物館、それから祐徳稲荷神社、そして鹿島市民図書館も、その一部を買い戻して下さいました。白蓮関連資料として紹介した「鹿島藩邸資料」や「柳原家範」もその中に含まれている資料だったのです。

今年は明治維新150年を迎え、長州が偉い、薩摩が偉い、一番は西郷どんだ等々、各地で記念事業が盛んです。その中で鹿島市が出した『再発見—鹿島の明治維新史』という本は、ご当地自慢と一線を画す仕事だと思います。鹿島にとって明治維新とはなんだったのか、そのことを豊富な資料に基づいて検証し、維新の功臣だけではなく、地域産業や女性にも目配りした本となっている点が、素晴らしいと思います。

II 篤誠院—女性の人材育成力

明治維新というと、どうしても男性の働きに目を奪われてしまいがちですが、人口の半分は女性ですから、女性たちがどんな働きをしたのかも見逃すわけにはいきません。そこで是非注目していただきたいのが、篤誠院という方です。先ほど鹿島の典籍の件で、篤誠院が集めた本についても触れましたが、その方について少しご説明いたします。

篤誠院は、9代直彝の夫人です。隣の小城藩から輿入れされた方で、お名前は篤子、篤姫です。今では將軍の夫人となった薩摩の篤姫が有名ですが、こちらの篤姫様は鹿島に輿入れをされました。しかし直彝は病気がちで、篤誠院が28歳の時に亡くなっています。それから13代・直彬までの間、何人も藩主が交代しますが、この間、鹿島はとても大変でした。佐賀本藩から見ると支藩の鹿島は、常に吸収合併の対象としての危機にあったのです。その中を持ちこたえながら、直彬まで繋いでいくのに、扇の要のように、人々をまとめる力になったのが、篤誠院だったのです。

江戸時代の大家の奥の女たちの一番大事な仕事は、次世代の養育です。跡継ぎを生むだけでなく、藩をまとめていくだけの力量を持った藩主に跡継ぎを育てていくこと、これが奥の女性たちの最大の務めだったのです。ですから藩主の周りを優れた人材で固めることがとても大事な仕事なのです。それに、大名と大名を裏で結んでいくことも大切な仕事で、女たちのネットワークというべきものが、ずっと張りめぐらされていたのです。しかし努力してもうまくいくとは限らない次世代育成とネットワークの構築に、篤誠院の発揮した手腕は見事なものでした。

その篤誠院が果たした役割を伺う格好の資料として、院が編まれた『富草集』という歌集が、祐徳稲荷神社に残っています。篤誠院が54歳から亡くなられるまでの26年間、毎年1冊ずつ編んだ歌集で、

24冊が現存しています。その『富草集』を見ていきますと、男性も女性も歌や漢詩を詠んでいます、鹿島だけではなく、小城や佐賀の人々を含む多くの人材が集まっています。鍋島閑叟公の学友で、のちに殉死した古川松根という有名な学者も名を連ねています。それから、多久の草場佩川、船山も漢詩を献上しており、篤誠院が藩を跨いだ豊富な人脈とつながっていることがわかります。ここに奥のネットワークの優れた見本を垣間見ることが出来るわけですね。

篤誠院が毎年行ったのは稲（＝富草）の花見で、そこで宴を催して歌や漢詩を詠み合ったのです。それが『富草集』です。原忠順は歌集の中に「観稲花記」という文章を遺して、「柏岡夫人（＝篤誠院）が稲の花を一望する舞台で、侍女に詩文を献上させたことは、民の暮らし向きを認識し、民の生活を豊かにするためである。人々の幸せや国造りの基盤は稲作を第一にすると考え、それを実践した篤誠院はなんと素晴らしい人だろう」と、讃えています。稲の花を觀賞し、歌を詠むことを通して、国を治める者の心得と文治の力を浸透させていく、そうした院の教育力が発揮される場が、『富草集』の花見だったに違いありません。

『富草集』には院に仕えた女性たちも歌を詠んでいます。縫子という名前で出てくるのは、原忠順の妹の原縫です。忠順のような才能ある男子は藩主の側近に、優れた女子は有能な藩士の妻として配していく。藩内のネットワークが手に取るようにわかります。

では載せられた歌を紹介しましょう。院の歌で最も早いのは、嘉永4年のものです。

「去年よりも わきて田面はみちみちて さかえを見する富草の花」

最後の歌は明治9年、篤誠院78歳の歌です。

「秋風に もまれて咲けるとよ稲の はなに玉ちる露の千町田」

一望千枚に続く田野は豊かに雨を受けて、今年も豊作を約束する稲の花が咲いた、そういう光景を読まれています。

そして縫子、先ほどお話しました原忠順の妹で、後に中野万亀の母となる原縫の歌です。

「幾千代も 君が愛にし富草の こぞより増さる花の豊けさ」

篤誠院の仕事として『富草集』以上に有名なのは鹿島錦で、のちに佐賀錦として全国ブランドになりますが、始められたのは篤誠院であり、こうした面でも特筆すべき女性という事が出来ます。原忠順や妹の縫をはじめ、いろんな人が院の感化を受けて、直彬公を支えています。今日お話いたします中野万亀が生まれたのは明治時代ですが、系譜から言えば、篤誠院の教育力の範囲の人であり、院が育てたと言ってもよいのではないかと思います。

Ⅲ 鹿島人脈のなかの萬亀

直彬は先ほど言いましたように柳原前光から囑望され、中央政界で活躍しますが、後に華族土着論を唱えていきます。明治政府は中央集権国家を作るために、藩主たちを土地から切り離して東京に集めます。しかし、直彬は明治23年には鹿島に籍を移して鹿島に腰を据え、この地を守ることに尽くしたのです。中野万亀が結婚したのは明治25年ですが、結婚と同時に夜学校を開校しました。直彬が鹿島に腰を据えたことと、万亀が嫁ぎ先で、夜学校を作り、地域の青少年を育成していくこと、何か深いところでのつながりを感じることが出来ます。

ここで中野万亀を育てた人脈を見ていきますと、伯父が原忠順、昌平黌で学んだ秀才です。彼は直彬のお供をしてアメリカにわたりますが、後には貴族院議員になりました。その妹の縫は、篤誠院に仕え

た後、田中馨治と結婚します。田中縫の顕彰碑は鹿島高校に今も残されていますが、結婚相手の田中馨治は、原忠順以上に影が形に添うごとく、生涯を直彬公に仕えた人です。閑叟公における古川松根と同じと言っても良いでしょう。直彬が沖縄県令になった時も、沖縄に行っていて働いています。その後、藤津郡郡長になり、中野家の前の道も田中馨治が造った道だということです。さらに後には、鍋島家の家令となり、祐徳稲荷神社の宮司も勤めている人物です。その田中馨治と縫の長女として、明治5年に生まれたのが、中野（旧姓、田中）万亀だったのです。

弟の田中鐵三郎は、東京帝大で経済を専攻し、満州中央銀行、朝鮮銀行総裁を務めた秀才で、直彬公から非常に愛され、今度は田澤義鋪とともに、直彬の長男の学友に選ばれているのです。つまり原忠順が直彬の年長の学友として篤誠院から配置されたように、直彬も自分の子弟の周りに、田中鐵三郎や田澤義鋪を配していったのです。大名家の伝統がこうして受け継がれているのです。

先日市民図書館で見せていただき、大変驚いた本があります。それは田中鐵三郎が書いた『国際経済の片影』という昭和8年に出版された、国際金融についての本なのです。発行人は中野万亀、そして発行は、なんと七浦村中野夜学校同窓会と記されていました。昭和8年に七浦村からこういう高度な本が出版されている。印刷は東京のようですが、夜学校がどういうレベルで勉強していたのかわかる非常に貴重な本ではないかと思います。

そしてもう一人、万亀の活躍に欠かせないのが、夫の中野権六です。権六については、わかっていないことも多いのですが、幼い頃、谷口藍田に学び、明治18年にはアメリカに渡り、そこで現地邦人対象だと思のですが、『十九世紀新聞』を出しています。大変なモダンボーイだったのです。帰国後は鹿島鋳造館の英語の先生になりました。直彬の努力により、明治期に鹿島英語学校ができますが、それを改称したのが鋳造館で、その教師をしているのです。英語学校の蔵書目録が残っていますが、当時の藩校時代の学問と違って、統計学だとかヨーロッパの歴史だとか、本当に先端的な本が集められ、教えられていたことがわかります。同時にそれは直彬の蔵書と重なるのです。おそらく直彬が英語学校に貸し与えたものでしょう。

IV 中野萬亀の「夜学校」

現在、太良町伊福に、非常に大きな「中野万亀子先生頌徳碑」が建っています。この間私も見せていただきましたが、女性で、これだけの碑文を贈られているのは余り前例がなく、本当に驚きました。それは昭和9年に中野夜学校同窓会が建てた碑なのですが、碑文を要約して紹介します。

「万亀は佐賀県立師範学校女性部の第一回卒業生であり、部落青年のために夜学校を起こした。爾来四十年に亘って、その教えを受けたものは既に百余名に達している。実に多くの人々に教えを広めた」、「学んだ者は一村の中堅たる者少なからず」、「婦人会を設け、其の知徳を啓発し、女子青年を率いて非常救護の班を結成し、其の奉仕的協同精進を涵養し、或いは部落の貧困者を救助し、或いは農繁託児所を設立。各種団体を後援する等枚挙にいとまあらず」、「文部大臣表彰をうけ、昭和八年には高松宮殿下より婦人、青年教化に対する功労者として銀製花瓶を贈られた」と記しています。伊福に残っている碑文は、高松宮殿下からの表彰を記念して建てられたのでしょう。



中野権六さん（スクリーン）

では、中野夜学校はどういうことをやったのか。これは『田中鐵三郎先生伝』という本の中に出てきますが、「小学校を卒業した男子を、結婚するまで自宅に集めて夜学を実施した」とあります。ですから、全く字が読めない子ども達にイロハを教えるという識字学級的なものではなかったようです。万亀が一人で漢文、今古史談など教授したようで、「生徒は面白がって通学し、出席簿、試験はなく、目的は青年の夜遊びの防止と新知識の注入である」と書かれています。また「中野権六氏は七浦きっての素封家である」と記されているように、結婚と同時に夜学校を作ることができた背景には、明らかに中野家の財力があつたわけです。それにしても、新婚当時から晩年に至るまで、奥さんの活動を保障した権六の寛容さは、本当に大したものですよ。

夜学校の他に、屋敷内には「中野家庭寮」という花嫁学校を設け、藤津郡内の女子青年を集めて、起居寢食を共にしたという言葉が、碑文建立の際に作られた「祝辞集」に出ています。夜学校の方は男子対象、花嫁学校は女性たちで、現在も残っている中野家の中で両方が営まれました。写真を見てもわかるように、立派な屋敷で、中野家の財力を物語っています。そこで女性たちが起居寢食を共にしたということですが、これは後に田澤義鋪が青年団で実行したことで、青年団の特色の一つである起居寢食を共にするという、先駆けにもなっているように思います。



中野家庭寮

そして夜学を終えた人々を見れば、農事の研究及び改善に、或いは共同作業、奉仕作業に中堅人物として、大いに活動、「本村の人情は純朴にして、実に現時稀にみる優良村なり」と書かれているように、中野家の活動というものが村全体を潤していたということが、わかります。

夜学校が開校した明治 25 年という事に因んで言いますと、樋口一葉が亡くなったのは明治 24 年です。彼女は自由に本を読み、小説を書いています、それは彼女が結婚しなかったからで、その上、女の戸主だったからだと言われています。

母と妹の扶養義務を負っていますが、その分、一葉は自由に本を読むことが出来たわけですね。石牟礼道子さんの話もさせていただきますが、昭和の時代を生きた石牟礼さんでも、結婚して新聞を読んでいたら、近所の人から「あそこの嫁は新聞を読んでいる」と言われ、とても苦勞したそうですから、まして明治 20 年代の萬亀は女性の身でこんなに自由にやらせてもらえたのですから、やはり特筆すべき事ではないでしょうか。

V 明治教育史の中の「中野夜学校」

では、万亀が開いた夜学校を、教育史の中でどう位置づけるかということですが、明治 5 年に政府が出した「学業奨励に関する被仰出書」に「必ず邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん事を期す」とあって、これからは皆が学問しなければならないと政府が言い、小学校を 53,760 校建てると宣言しています。人口 600 人につき 1 校建てると言ってるのですが、もちろん財政が許すはずありません。ただ教育にける政府の意気込みは伝わりますし、明治 19 年の「小学校令」になると、義務教育であることがうたわれていきます。

しかし実態はどうかというと、明治 22 年の小学校就学率は、男子が 63.3%、女子は 30.5%、全体で見ると 48.2%です。明治 22 年の段階で、国民の半分は小学校に行けなかったということがわかります。

何故かという、義務教育がただではなかったからです。学費自弁主義、国民負担というのが原則でして、学校に行くためには月謝を払わねばならないわけです。しかし、そうは言っても、字が読めない子どもたちが国民の半分もいるのでは近代国家としてはどうかということですね。そこで「貧民夜学校」という貧しい民衆を対象とした、小学校課程相当の学校を政府も認めざるをえなくなります。文明が進むにつれて、もっと先の勉強をしたいという人が出てきます。つまり、夜間小学校ではなくて、夜間中学校という中等教育のニーズが出てくるのです。明治期の夜間中学の研究はまだまだ遅れており、実態はきちんと出ていませんが、例えば良く知られた中等教育に対応する夜間中学の例としては、明治 27 年に札幌で新渡戸稲造が開いた「遠友夜学校」、それからこれもキリスト教系の「福音会英語夜学校」が明治 32 年、それから明治 37 年に「古橋産婆夜学校」ができています。こういう動きの中で、小学校を終えた男子を対象にした中野夜学校の開校が明治 25 年なのですから、中等教育課程の夜学校の歴史の中で、中野夜学校は非常に早い開校例として、位置づけが必要ではないかと思われまます。

政府が勤労青少年教育に本格的に対応するのは、明治 35 年の「改正実業補習学校規定」からです。日露戦争を契機として、そうした夜学校が飛躍的に増大しますが、中野権六が明治 43 年に青年会を組織して設立した「補修夜学校」にしても、内容は良くわかってないのですが、「改正実業補習学校規定」が出される時代の動きと連動しているのではないかと想像しています。

以上のことを踏まえて、中野夜学校を（今は詳細な資料がまだ見つからないために、一部のことしかわかりませんが）歴史的にどのような位置にあるかを考えておきたいと思います。

この鹿島に、佐賀県立鹿島中学校ができるのは明治 34 年ですが、そこに至るまで、直彬を初めとする鹿島の人々は大変な努力を重ね、英語学校や鍛造館を創設して、繋いでいったのです。しかしそれはあくまで昼間の学生、ある意味恵まれたエリートが対象です。それに対して萬亀の夜学校は、働いている地域の人たちの教育を担うものでした。つまり、直彬たちが始めた鹿島の中等教育を補完する形で、その恩恵に浴することが出来ない勤労青少年たちのための夜学校だったという事が出来ます。小学校相当の「貧民夜学校」が殆どであった明治前期にあって、中等教育に相当する先駆的な試みであり、日露戦争後の「補修学校」の拡大普及へとつながる貴重な試みとして、位置づけることが出来るのではないのでしょうか。

VI 地域を育てる—中野萬亀から田澤義鋪へ

萬亀という優れた女性が、鹿島が伝統として育んだ人材育成力から生まれたことを御理解いただけたと思いますが、それは時代が近代になっても、萬亀にとどまるものではありません。田澤義鋪、それから同じ佐賀の下村湖人の地域教育を、関連して考える必要があると思います。

中野萬亀から田澤義鋪へ、つまり夜学校から青年会へという流れについて、少しだけ触れさせていただきます。青年団運動が本格化するのは、昭和になってからです。山本瀧之助が『田舎青年』で、都会の青年ばかりでなく、田舎で頑張っている若者も青年と呼べと主張します。しかし、この時は青年をつなぐ全国組織はありませんでした。全国組織にしたのが田澤義鋪です。ここで田澤、下村の業績について語るの控えますが、彼らの真価が、軍国主義に抗した晩年にあったこと、それは人を育て、地域を豊かにすることこそが教育だという方針を曲げなかったことを紹介して、結びにしたいと思います。全国青年団の要職を退いた田澤と下村は、「煙仲間」を結成して根気強く活動を持続していきます。その活動方針は、政治的英雄は要らないというのが彼らの立場です（下村湖人『煙仲間』囃 18 年）。国民の

一人ひとりが、真の立憲人になることが大切で、自分が英雄になることではないのです。これを田澤義鋪は「地下水になれ」と言っています。目に見える川の流れてはなくて、地下深い水が田畑を潤すように、青年たちに地下水になりなさいと主張していますが、「煙仲間」とは地下水になりなさいという運動に他なりません。「彼は死ぬほど村を恋し、国家を恋します。しかしその恋は忍ぶ恋なのであります。『恋死なん後の煙にそれと知れ ついにもらさぬ中の思いを』という心をもって、ご奉仕するのが煙仲間です。」とも言っていますが、「煙仲間」という言葉の由来が『葉隠』にあるのは明らかでしょう。真の恋が死後の煙でその心が分ればいように、本当に学ぶこと、そして働くという事は、その人の名前が英雄として残ることではなく、地下水となって、地域を知らぬ間に潤していくことなのだというのが「煙仲間」の運動であり、地域を拓くことの見事な思想を見て取ることが出来ます。

本日は話があちらこちらに飛びましたが、明治維新史のなかで顧みられることのなかった女性の力を、篤誠院から中野萬亀に受け継がれた人材育成力として見て参りました。さらにその根本にあるものは鹿島という地域に蓄積された文化の力であることもお分かり頂けたと思います。鹿島の地は、人を育てる力としての文化を大事にしてきた地域であり、その成果がこの地を潤してきたのではないか、ということをも以て本日の話を締めくくりたいと思います。

と言いつつ、補足をもう一点だけ。歴史は見方によって違う顔を見せるものですよ。ですからそのためにも史料が残されて、歴史の検証に耐えていかなければならないと思います。2月14日に石牟礼道子さんが亡くなりました。彼女は『苦海浄土』の作者として知られています。彼女は水俣病に非常なる衝撃を受けました。つまり近代というものを頭から信じて、その恩恵に浴してきたけれど、近代って一体何なのか、という疑問を持ちながら、『苦海浄土』を書き継いでいきます。『苦海浄土』は1部から3部まであり、『苦海浄土』作品全体は、40年かかって書き継がれてきたものです。それを書くに当たって、石牟礼さんがやったことが『西南の役伝説』という本にまとめられています。明治10年、西南の役という戦争を民衆がどういう形で受取ったかということ、人も通わぬような場所を訪ね歩いて、聞き書きしています。すると、一部の英雄が活躍する物語とは全然違う、別の明治維新が見えてくる。石牟礼さんは『西南の役伝説』を書きながら、それを力にして、『苦海浄土』を書いていきました。その中には民衆の言葉である方言が見事に生かされています。これは日本の文学と歴史の中で、非常に大きなものとして検証していかなければならないと思います。

このたび鹿島市が、『再発見 鹿島の明治維新史』や『田島勝爾の生涯と田島精神』という本を編まれましたが、鹿島でしか書けない歴史的真相がこうした形になった事は素晴らしいことだと思います。今後ともこうした活動をぜひ続けていただきたいと願っています。

皆様、本日は最後までお付き合いいただき、有難うございました。